

コミュニケーション能力形成に関する母親調査とその考察

夏秋 英房(聖徳大学短期大学部)

1. 研究の意図

本発表は、母親のコミュニケーションに関わる態度・行動が、子どもへどのように作用し子どものコミュニケーションに関わる態度・行動を形成してゆくのかを、コミュニケーション能力の観点を踏まえながら考察するものである**。ここでは、コミュニケーションに関わる態度・行動のあり方をコミュニケーション・スタイルと名付け、母親のコミュニケーション・スタイルと母親から子どもへのコミュニケーションに関わるしつけ、そして子どものコミュニケーション特性を質問項目に設定し、調査を実施した。

本発表の焦点は幼児及び児童期(小学校低学年、中学年)の子どもにとっての言語環境に絞った。現代の子どもたちは、自分の意見を発表する能力や論理的な思考力が不足しているという指摘がしばしばなされる。また、小学生でさえ子どもたちの対人関係の希薄さがあるとの指摘もなされている。その結果として、コミュニケーション能力の問題、とりわけパーソナルコミュニケーション能力の乏しさが注目されるようになってきている。

このような事態の要因を、自己中心的な段階にあるこの年齢の子どもに関してのコミュニケーションの有り様を大人との関係性において探ってみようと考えた。言語環境のなかでも、人的なもの、及び、対人的なものを重視し、この年齢の子どもにとってモデリングの対象である母親を質問の回答者に選定した。

分析したデータは、聖徳大学児童学研究所子どもの遊びと生活班が1997年に千葉県松戸市を中心にした幼稚園・保育所・小学校の保護者1503名を対象として実施した質問紙調査のなかから、母親が記入した1422ケースを抽出したものである。

質問項目は、国語教育学研究者との共同研究により作成したが、国語的な観点から演繹的に構成したのではなく、母と子のコミュニケーション・スタイルと母子関係の特性に関わるデータを、コミュニケーション能力の観点から解釈し、それらの関連を明らかにすることを試みた。

2. コミュニケーション能力とは

ここでは、コミュニケーションを「言語・非言語の行為や図表・絵などによる記号及びコードを用いて、意味を交換・交流する過程」と考え、その基本的要素はパーソナル・コミュニケーションであること、表出的及び自己完結的なコミュニケーションであること、相互的・直接的な対面コミュニケーションでもあることと操作的に限定して使用したい。

また、コミュニケーションにかかわる能力は学習可能な可塑性に富む能力であると仮定する。

以上のように設定したうえで、特にコミュニケーション能力を国語教育学の知見を踏まえ、以下の4つの要素から構成した。(1)、(2)、(4)はそれぞれ自他の関係性にかかわる要素であり、有機的に関連しているものである。

(1) 自己開示力

自己表現を機能的な面から捉えることで顕現する力である。自己開示力とは「他者に交流・相互性を求めようとする力」のことを言う。または、「自己のさまざまな面をあるがままに相手に伝え、それに対する相手の返報を社会規範にも求めようとする力」のことを言う。

(2) 他者受容力

他者受容力とは「他者との関わり性を受け止める、共感する力」であり、開示したコード、情報の発信

を流れとして受け止める力である。

(3) 論理的思考力

自らが、意見を出すことが可能になるためにはそこで、物事をものとはこととの関係性からとらえていこうとする論理性、抽象性の育ちが必要である。「社会的なラングを踏まえてことばを用いる力」、「構文意識、言語を規範的に用いることが出来る力」「メタ言語によるふりかえりが出来る力」などこのような力を総称して論理的思考力と捉える。

国語教育学の研究では次のようにその力の内包するものを言う。

- 1, 形式論理学の諸法則にかなった推論のこと
- 2, 筋道の通った思考、つまりある文章や話が、「前提と結論」「主張と理論」といった論証の形式を整えていること
- 3, 分析、統合、抽象、比較、関係づけなど広く直観やイメージによる思考について「概念的」思考一般のこと

(4) 倫理的思考力

「他者との交流を深めるための行動規範の力」のことを倫理的な思考力という。国語教育学では、単なる常識やことばを用いる上での礼儀の範疇におしこめられていたことが、「他者との関係を円滑にするための対他的な力」として捉えられ「洗練コード」の学習という形で敬語の使い方、レトリック、暗示的表現、話しのマナーなどが指摘されている。

3 母親および子どものコミュニケーション・スタイルとその形成要因

子どものコミュニケーション能力の形成には、母親が直接的に言葉の規範的な使用への注意を子どもに喚起し、表現の明瞭性と積極性を高め、文字に親しむ習慣・態度を培うことが大きく影響する。とともに、母親は子どものコミュニケーション・モデルとして重要な影響を及ぼしていると考えられる。

そこで、前節までに述べた国語教育学のコミュニケーション能力の観点を踏まえながら、母親のコミュニケーション・スタイルと母親から子どもへのコミ

ュニケーションに関わるしつけのありかた、そして子どものコミュニケーション特性と社会的行動・態度の関連について検討をすすめた。得られた知見は概ね以下のものである。

まず、母親のコミュニケーション・スタイルの12項目の回答結果をコミュニケーション能力の4要素と関連づけながら、①倫理的思考力、②文字志向・論理的思考力、③言語的自己開示力、④非言語的・共感的自己開示力、⑤他者受容力に分類した。

さらに、子どものコミュニケーション・スタイルについて母親に14項目でたずね、コミュニケーション能力の4要素と関連づけながら、①言語的自己開示力、②倫理的思考力、③非言語的自己開示力、④権威ある他者を受容する態度、⑤防御的な自己開示力の5つに分類した。

しかし、これらの分類は母子ともにそれほど説明力の高いものとならなかった。コミュニケーション・スタイルの項目は各々複数のコミュニケーション能力の要素を複合している。

また、母親から子どもへの、コミュニケーションにかかわるしつけについて10項目でたずね、①表現の明瞭性と積極性の強調、②状況や規範への同調、③文字や記号への接触と学習の勧奨の3つに分類した。

これらの関連を検討した結果、いくつかの知見が得られた。たとえば、母親の言語的自己開示力の影響は、幼児の生活全般に及ぶのに対して、児童の場合は言語的に明瞭な自己開示や文字への親和性など、言語的な領域に焦点が定まってくる。また、母親が言語的自己開示と倫理的思考力のモデルとなることで、小学生には、言語使用の発達と規範の内面化に影響がある。また、幼児にとっては母親の積極的な自己開示が子どもの社会的関係に影響している。

(以下、当日配布する資料をご覧ください)

**本発表は、夏秋英房、有働玲子「コミュニケーション能力形成に関する一考察」聖徳大学児童学研究所紀要創刊号、1998年に基づいている。